フォトエッセイ＃１８１

北日本の三大名園の一つ

「香雪園」ご案内

小学生のころよく虫取りに来ました
市電の湯川終点から坂道を
３～４０分ほど登ったところにあります

僕たちは「きゅうしめいち」と呼んでいます
ここは豪商岩船峯次郎のかつての別荘庭園
屋号が「久」と「メ」と「一」の組み合わせ

2025.5.26
島 田 祥 生

香雪園のいわれ

香雪園は函館市の素封家岩船峯次郎氏（屋号笠）が1901年ごろより造園に着手したのが始まりでその後1920年ごろ京都の庭師辻地川を招き、約三年を要して石材は道南一帯から、樹木の大半は本州から運んで造成し、いらい親子三代にわたり私財を投じて完成した純日本式庭園である。当時の知恩院貫主により、"雪の中に梅香る園"の意で香雪園と名づけられた。

岩船家が市民慰楽のためにこの名園を設置された偉業を讃え、この碑を建てる。

函館市

園内はよく手入れされている
つつじは終わりを迎えているが
新緑が心地よい

向こうに見える建物は
管理人が住んでいたとか

件の建物です
管理人の住まいだったとのことですが
半端ではないですね

大きな満天星つつじ（どうだんつつじ）の
お出迎えです

白い花のものはよく見ますが
赤い筋が入っていて大きい
カワイイ

園内のつつじは
殆ど
この色の立派なもの
緑とのコントラストがなかなか

ここのつつじにも
花粉と蜜を求めてハチたちが
これは
マルハナバチの仲間だな

ここの庭づくりに
全国から１５０種類の植物を
取り寄せたそうです
そうそう広さは１４万坪
ピンとこないですね
新宿御苑が１８万坪だそうです

このあたりは
ゆったりとした空間が広がっています
つつじの配置が素晴らしい

ゆったりとした空間から
山間の風情に
で、ポツンと灯篭が
はて？

水辺に太鼓橋
まだどこがどうなっているのか
スケールの大きな庭造りに
ついて行けません

園の入り口からかなり奥まったところに
忽然と瀟洒な建物が

「園亭」と呼ばれている
この庭の中心的建物

そう、あの灯篭はお出迎えのもの

園亭の内部
う～～～ん
またまた、「半端ではない」ですね

ここでどんが宴があったのでしょうね

部屋の周りは廊下
眺めも見事
庭づくりに
北海道中から石を集めたそうです

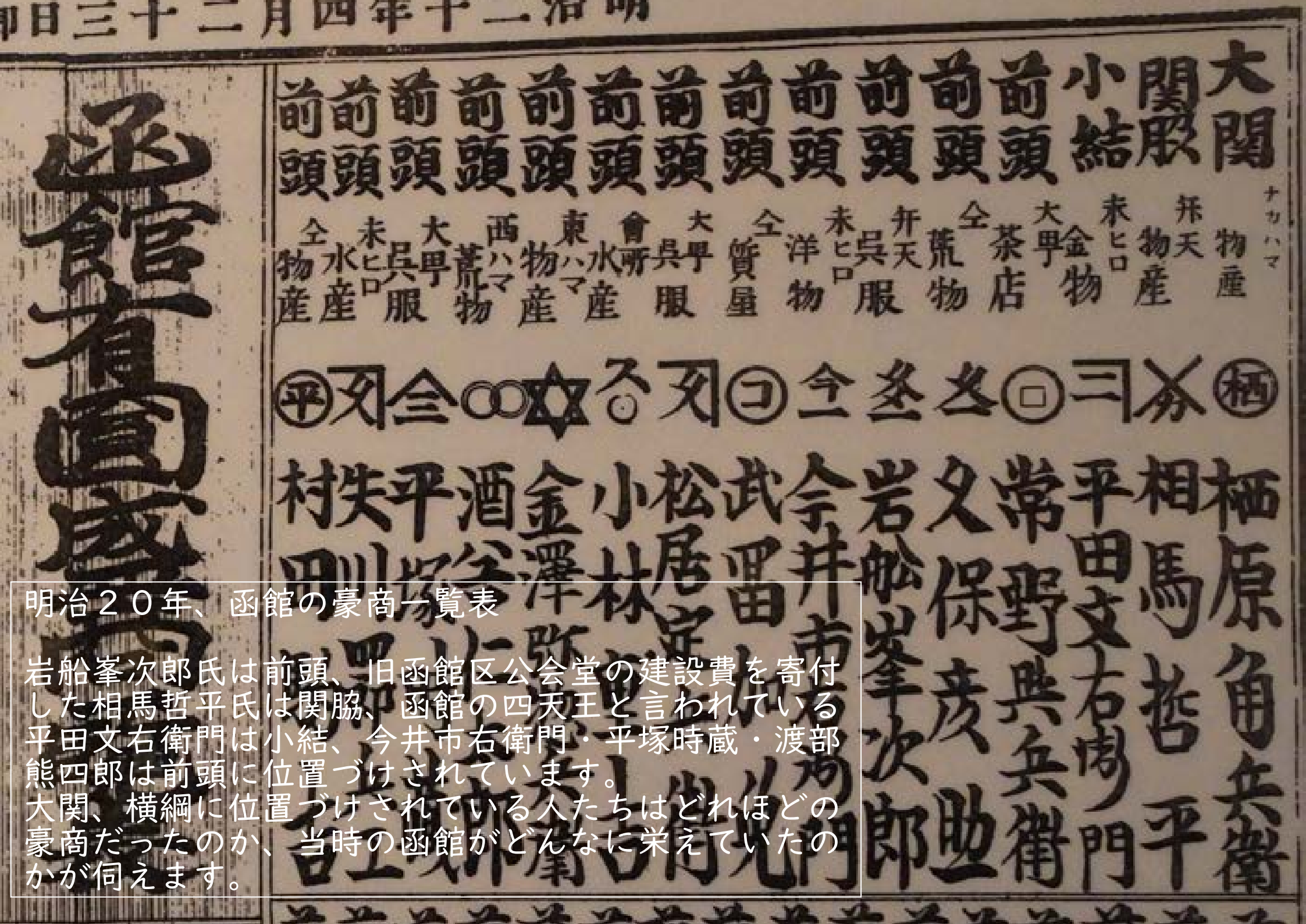
だんだん分かってきました
灯篭の役割
緑の中に園亭が覗かれます
お客はこの道を通って園亭へ

この坂を下って
太鼓橋を渡って
灯篭に出迎えられて・・・
見事な演出ですね

明治末期から大正初めにかけての写真

懐かしい園亭写真

今もほとんど変わらない佇まいのようです
太鼓橋も珍しかったようですね

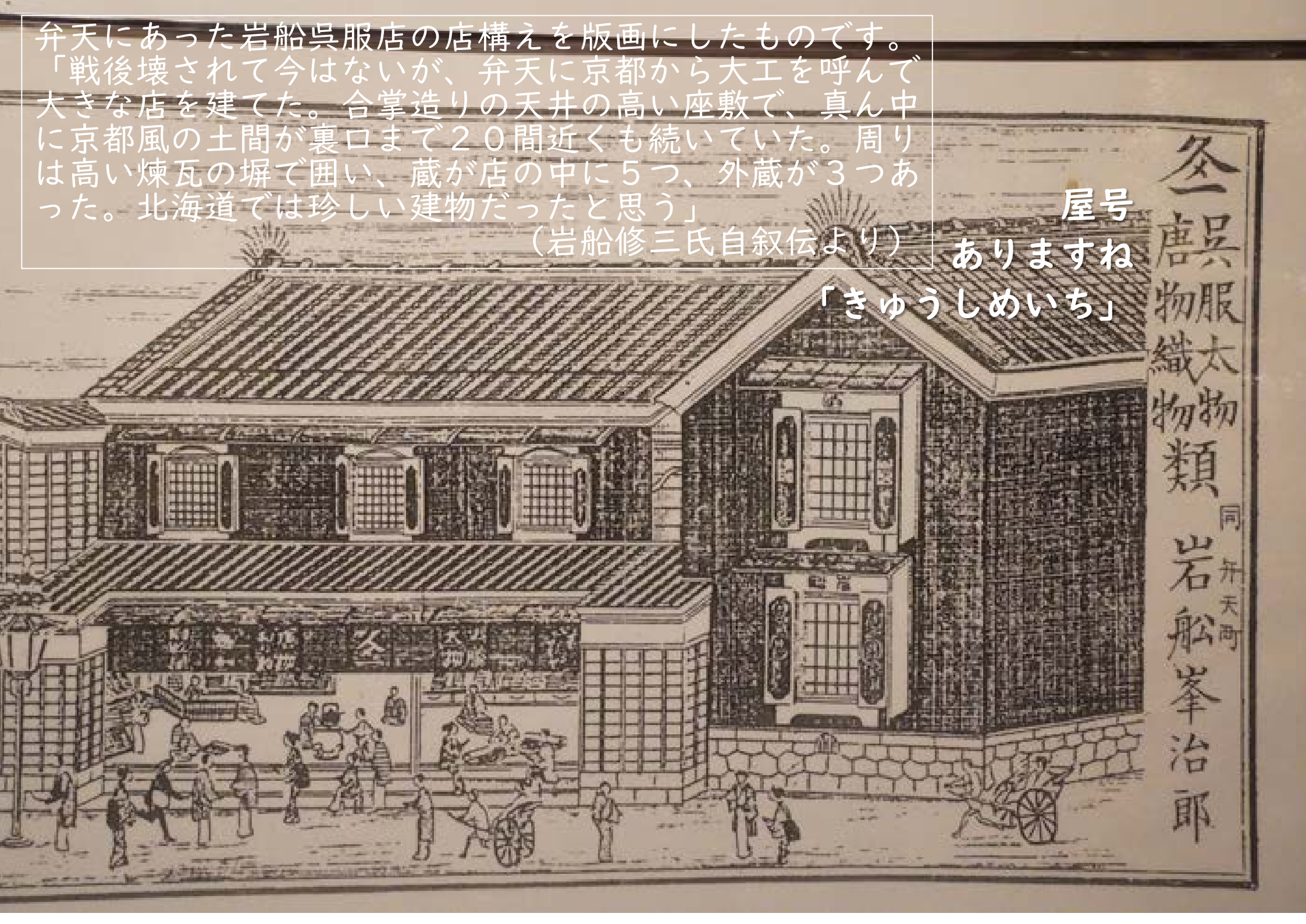


明治２０年、函館の豪商一覧表

岩船峯次郎氏は前頭、旧函館区公会堂の建設費を寄付した相馬哲平氏は関脇、函館の四天王と言われている平田文右衛門は小結、今井市右衛門・平塚時蔵・渡部熊四郎は前頭に位置づけされています。
大関、横綱に位置づけされている人たちはどれほどの豪商だったのか、当時の函館がどんなに栄えていたのかが伺えます。

弁天にあった岩船呉服店の店構えを版画にしたものです。
「戦後壊されて今はないが、弁天に京都から大工を呼んで大きな店を建てた。合掌造りの天井の高い座敷で、真ん中に京都風の土間が裏口まで２０間近くも続いていた。周りは高い煉瓦の塀で囲い、蔵が店の中に５つ、外蔵が３つあった。北海道では珍しい建物だったと思う」
（岩船修三氏自叙伝より）

屋号
ありますね
「きゅうしめいち」

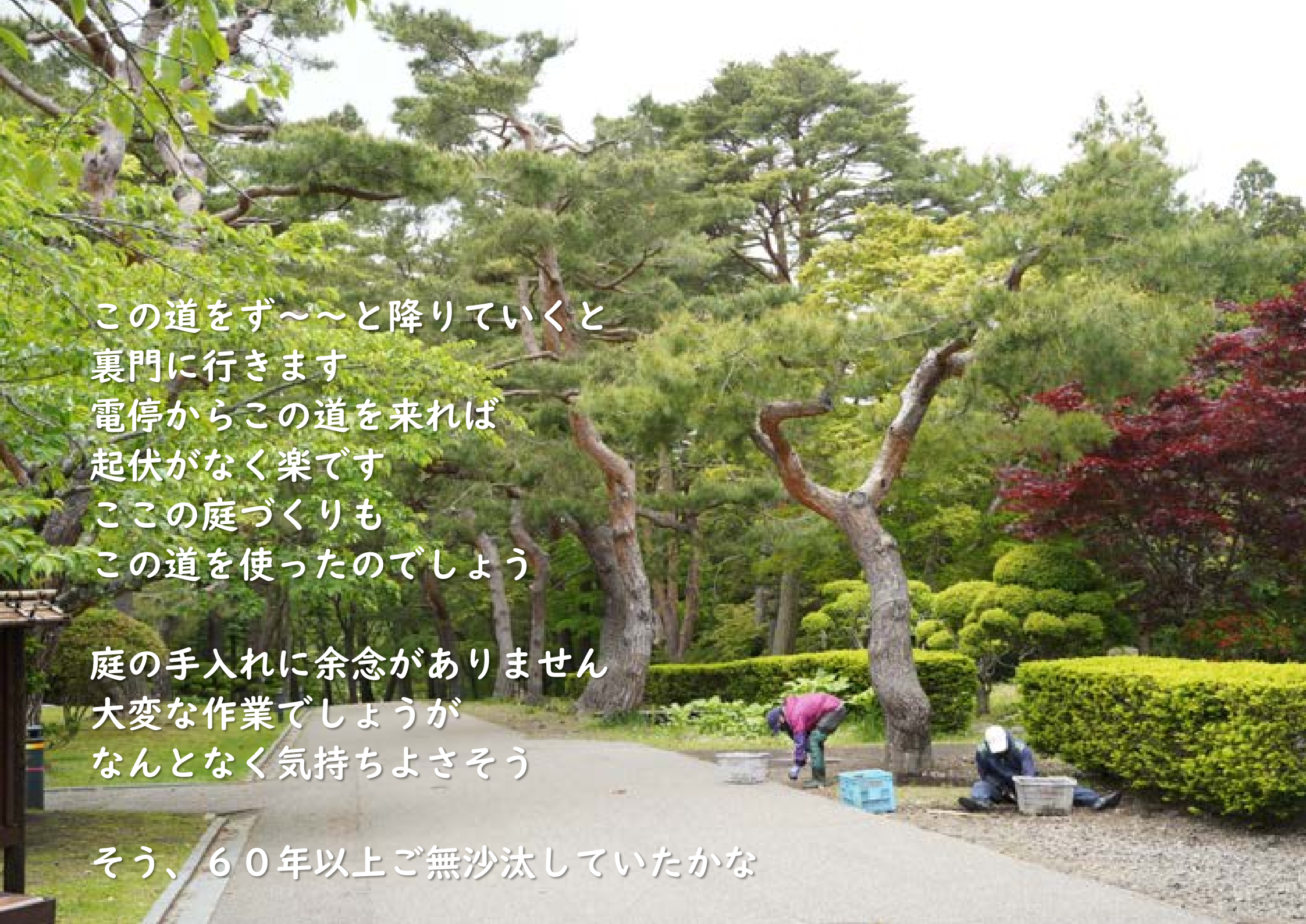


緑が目に染みる
ヤマモミジにしては
緑が明るすぎますが
とにかくきれいです

イタヤカエデも葉を広げて
幹が程よくうねっているのは
雪のせいかな

根の張り具合と言い、枝の張り具合と言い
まるで盆栽

先ほどの空間に戻ってきました
木々の配置が
何とも素晴らしい・・・と
また言ってしまいました


この道をず～～と降りていくと
裏門に行きます
電停からこの道を来れば
起伏がなく楽です
ここの庭づくりも
この道を使ったのでしょう
庭の手入れに余念がありません
大変な作業でしょうが
なんとなく気持ちよさそう
そう、６０年以上ご無沙汰していたかな